

雷風義塾と平田古道学

研
究
所
報

久保田（秋田）藩における藩校の開設は寛政四年（一七九二）で、平田篤胤大人の漢学の師とされる（『大壑君御一代略記』による）初代祭酒中山菁莪をして開講された。その後、文政八年（一八二五）には全国でも可成早い方で「和学方」の設立をみている。和学は久保田藩では後に「本朝学」とも称される、所謂国学である。だが、他藩にみられるような独立の和学館は終止存在しなかった。また十分な財政に裏付けられていた和学方でもなかつた為、その活動には自づと限界があった。そして大保十二年（一八四一）には晩年に近かつた篤胤大人が秋田へ帰藩しても、

その学問は折角の和学方では受け入れていいのである。当時、仁孝天皇から著述天覽の大榮誉をうけ、全国の祠職のほとんど傘下にしていた吉田家からは、神官祠職への古学教授を委嘱されるなど、高い名声のあつた篤胤大人でも、郷里久保田藩では、この大學者に対しても忌諱の態度をとっていた。和学方の主流は本居宣人の人々で占められていたほか、郷里に帰省してからも藩の待遇は必ずしも好ましい状態であったとはいえない。没するほどにも正式にその学問を受け入れる状態は遂になかつたのである。

天保十二年四月二十二日（秋田

齊藤壽胤

社
行
所
神
平田篤胤と佐藤信
淵の学問と事蹟
彌高神社外伝
佐藤信淵大人追贈
高
発
編
秋田市千秋公園1-16
電話 0188-32-4496

雷風義塾と平田古道学	齊藤壽胤	1
平田篤胤と佐藤信淵の学問と事蹟	齊藤壽胤	2
彌高神社外伝	波谷鐵五郎	11
佐藤信淵大人追贈	桐原善雄	16
余談		

（帰着）から天保十四年（一八四三）九月十一日死去するまで平田門への入門者は五十三人。このうち三十九人は秋田人である。これを見れば、この間の後援者がないわけではなく、梅津主馬、小野岡市太夫小野崎通貫の藩士、また数人の私的後援者や信奉者がいたが、これとても平田古道学の隆盛をみるとは至らなかつたことは前述の如くである。

こうした状況にもかかわらず、時代の波は大きく変革しようとしていた。平田古道学が秋田で正式に享受されるのは、文久三年（一八六三）の雷風義塾の設立を待たねばならなかつた。没後二十一年にしてようやく私塾ではあるものの、国学塾が設立され、ここでもねばならないかった。この歌

と刻まれた石碑が立っている。碑の背面には小野崎要の子、通亮の歌が刻まれてはいるが今日可成風化している。

いたづき立てむ國の真柱
にあたる大和田盛胤が、嗣子鉄胤等と関わって小野崎要等の協力、吉川忠安等が講師となり開化した

ものであった。以降、明治維新後まで平田古道学の興隆にともない、そこに学ぶ武士、商人等の支持を得て、藩論を次第に尊王派に傾け、遂に戊辰の役にして、秋田に錦旗をとらせたのである。『氣吹舎門人帳』によれば維新の前後には平田門入門者（没後門人として）がすこぶる多いことが解り、平田古道学も秋田に定着したといつてよいと考える。

この意味で、秋田の国学史上では雷風義塾の設立存在は極めて大きかつたのである。現在秋田市中通六丁目三番地（南通り沿）に雷風義塾址と刻まれた石碑が立っている。碑の背面には小野崎要の子、通亮の歌が刻まれてはいるが今日可成風化している。

いたづき立てむ國の真柱
と読みとることが可能だ。この歌には雷風義塾設立の思いと、平田古道学のもとに集う学徒門人等の思いが緊密と伝わってくる。この建立年月は不明だが、本来の雷風義塾が設立された場所は、現地よりも少し南の通り一丁裏手あたりとされる。

平田篤胤と佐藤信淵の学問と事蹟

齋藤壽胤

一、序

「篤胤信淵巨人の教え」と秋田県民歌にうたわれて親しみ、秋田県の生んだ大先覚者として終戦までは秋田県内各学校に二人の肖像画がかかげられていた。明治以降、特に秋田県では学問的偉人として教育関係者が主に推進し顕彰してきた。然し近年は教科書的知識程度での国学者篤胤、経済農政学者信淵という位で、その人となり、学問、思想、事蹟について深く知る人々は少なくなった。嘗ての秋田県教育会が学問教育の先人としての位置に据えてきたことも過去の事となりつつある。茲ではこの二者の学問と事蹟を具体的にとらえるものであり、更に余裕があれば現代的な意義を考察してみたいと考える。

二、平田篤胤の学問と思想

1. 生涯と事蹟*

前期1 出生と江戸に出るまで
前事蹟伝記については、鍼灸
流派『大駒君御一代略記』
を底本とするが、これには多少誤りがあることが
明らかとなっている。
*『平田篤胤』

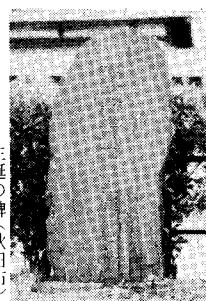
前期2 江戸出府当時の受難

*『略記』には享和元年「今

年年初メテ鈴屋大人ノ著者ヲ
見テ大キニ古学ノ志ヲ起ス」
とある。
*太宰春台『外道書』の批判

安永五年（一七七六）八月廿四日久保田城下、現秋田市中通に久保田藩士大和田清兵衛
祚胤の四男として生まれる。正吉と命名された。大和田家の財政的事情その他により正吉
は幼少より里子や養子に出されたらしく、親子の愛情も薄く育ったといわれる。元服して
胤行を名乗ったというがやがて二十歳の寛政七年（一七九五）の正月八日に、再び故里に
帰らぬという決心のもとに脱藩し江戸に出て、廿五歳に備中松山藩士平田藤兵衛篤穂の養
嗣子となり平田半兵衛篤胤を名のる寛政十二年（一八〇〇）までは、大八車の挽子、火消
し夫、团十郎に奉公、飯炊きまでして苦学を強いてきた。

享和元年（一八〇一）廿六歳石橋織瀬と結婚。翌年長男が生まれたが、僅か二歳で死去
している。享和三年には最初の著書『呵妄書』を著わす。この年に本居宣長没後の門人と
なったといわれる。この頃に古道学に目覚め、以後没年までの間、一心に精勤刻苦し、和
漢洋の書籍を読破し、生涯を学殖にうづめていったのである。



萬胤信淵巨人の訓
久遠に輝く北斗と高く
錦旗を護りし戊辰の栄は
矢留の城頭花とそ薫る
歴史はかぐわし譽る秋田
秋田県民歌

中期2

平田学の成熟期

* 服部中庸から本居太平宛の書簡に、「書見著述に掛り候ては二十日、三十日にても昼夜寝ることなく、劳れ候時は三日も五日も飲食せぬしで臥し又覚め候時は元の如し神々凡人には無御座候」とある。

* 「あれ比女よりいと若かりし時より親鸞あへる由ありて」と『靈能真柱』に詳しい。

* 鹿島香取に遊学參詣途次に拾得したもので神祕なものとして後まで珍重した。『大之君筆記』に詳しい。

* 鳥居著に『神子日文伝』(神子日文疑学論)があり、信淵著に『神子日文考』と『神子日文考補遺』がある。

文化元年（一八〇四）春に始めて講筵を開き、真菅乃屋と号した。翌年に長女千枝子（後において）生れる。文化四年（一八〇七）には医業を兼営し元瑞と改名。五年には二男半兵衛（後に又五郎）が生れる。この年神祇伯家より神職へ古学教授を委嘱せられる。文化六年には医業を廃してしまったが、医業は家計を補うためであつたらしく、関心は専ら国学にあつた。八年には『出定笑語』『古道大意』『俗神道大意』など所謂「大意」物などの著述もいよいよ盛んとなり、学問には心血を注いでいた。この年十二月初めに駿河国の門人の招請をうけ、この駿府客余中につけて『靈能真柱』草稿など『古史成文』『古史徵』などを著述。文化九年三十七歳の時、妻織瀬死亡する。「天地の神はなきかもおはすかもこの禍を見つますらむ」と詠う程、妻の死に對してはさすがの篤胤も氣をおとした。織瀬時に卅一歳。窮乏の学者家計の切り盛りと病弱な子供の養育に辛労した十二年を思うと名乗る。文政元年（一八一八）四十三歳。九月に一男又五郎十一歳で死去する。篤胤は門弟としてよりは学友として交渉し合つたようである。翌年氣吹舍と改称し大角（大壑）と名乗る。佐藤信淵が入門。その後信淵の名は著書にもしばしば見えており、文政十一年頃までの間、篤胤の氣持は、神々さえもうらむような氣持であつたろう。然し、これが契機となり、人間の死後の靈魂の行方を明らかにしようとする『靈能真柱』の稿の完成に深い考察と影響を及ぼすに到つた。文化十二年には篤胤大病にかかり、貧困にならんでいる。この年同郷の佐藤信淵が入門。その後信淵の名は著書にもしばしば見えており、文政十一年頃までの間、篤胤の氣持は、神々さえもうらむような氣持であつたろう。然し、これが契機となり、人間の死後の靈魂の行方を明らかにしようとする『靈能真柱』の稿の完成に深い考察と影響を及ぼすに到つた。文化十二年には篤胤大病にかかり、貧困にならんでいる。この年同郷の

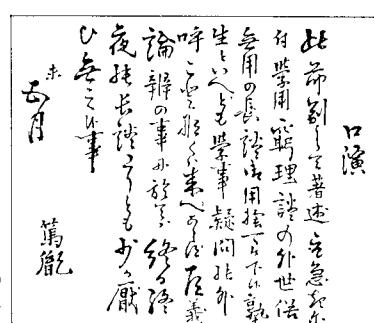
幼少からしても、独立しても家族との関係においては不幸な面がみられる。十一月には門人山崎長右衛門の養女りよと再婚する。先妻織瀬夫人に対する愛情には深いものがあつたのである。ここに迎えた後妻にも里勢と名乗らせていている。里勢夫人とに子はもうけなかつたが、先妻の遺子おてう（お蝶）を愛することは濃やかで肉親との差はなく接するなど晚年江戸を追放になつた篤胤に隨從し、篤胤の最後まで連れ添つた。文政三年（一八一〇）四十五歳。この年に初めて天狗小僧寅吉を知り、小年寅吉の語るところの幽界に深く耳をかたむけ、幽界に関する研究に傾倒していった。次年には神代文字の研究に進むなど、仙童寅吉との出会いにより、文政五年（一八二二）には『古今妖魅考』『稻生物怪録』等の著述がなされていった。幽界のことを闡明にするために種々の方法を採つて、生きながら幽界に赴いたことがある者から聽取する方法をよく用いていた。文政六年（一八一三）板倉候出仕を退身し、上京してこの年始めて服部中庸に会い、著書『古史成文』『靈能真柱』など数卷を仁孝天皇に献上し天覧の榮によくした。そして吉田家及び本居家を訪れて、吉田家から神職に古学教授を委嘱される。この時に師である宣長の贈位運動を積極的にしている。後に整理しまとめられた『毀誉相半書』に見られる如く、當時篤胤に対する評は



「天覽」印



「大之君筆」(千葉県熊野神社蔵)



「日演」

篤胤

此節割して著述を急ぐ
自學用、窮理詩の外世傳
無用の長説用捨てず
生べども學事疑問北外
呼ふと形く事、ひなた義
論辨の事、ひがみ、ゆる治
夜持書説うともがく厭
ひなこひ事

口演

*「我れ人皇國の大道の妨害を為したる者は悉く我が學問上の敵なれば少かも容赦なく速かに打罰むべき所より勅言は出るなり」と『毀譽相半書』に述べられてゐる

中期3 平田学の拡張

分かれ、反平田派の非難は可激しいものがあつた。これは本居学が国文、国語、国史についての文献考証学的研究法という即ち歌文派をとる立場にあり、篤胤は古道、古神道に対する宗教的思弁思想性をもつ、所謂古道派の立場で彼はその頂点に立つものであったからで、反対派は篤胤の強烈な思想性や情念性を嫌つた人々であつた。これらは現在までも尾をひいてゐる。而も、「師の説になすまざること」という考へで、学問上の論点相違にはたとえ師であつても厳しく対応したものであつたから、多くの場合は彼を嫌つたに違ひなかろう。然し、師に対する恩敬の念はまこと人の道に叶うものがあることは認めてよい。ここに人間性を見るものである。

文政七年（一八二四）四十九歳には門人碧川篤真を養子としておてうに配した。これが後の鍊胤である。文政八年（一八二五）、尾張徳川家に出入りを許され手当てを受けたが、これも後に幕府の意向により停止されている。この間、天保元年（一八三〇）頃に佐竹家の帰参を願い出、この運動は天保九年（一八三八）に叶えられるのであるが、長い間の本意はやはり帰参にあつたといわれる。文政九年（一八二六）に『大扶桑国考』が成る。この著作が後に問題となり、帰参の宿願叶つた時には絶版という事態になり、天保十二年に到つては著述差し止めという決定的な事がまちうけでいた。

文化八年より文政六年までは学問に心血をそそぎ込む。新しい思想形成の宿命かもしれぬが、悩みと苦しみは劍峨をのぼるが如き時代であつたと思われる。

文政七年から天保にかけては後継者鍊胤を得て多くの著作をし、平田学の拡張期をなしてゐた。この後平田学の後期ともいえる時期には林大学頭の答申による幕府の公権力の干渉など、少しづつ幕府の忌憚にふれていたととらえられる。

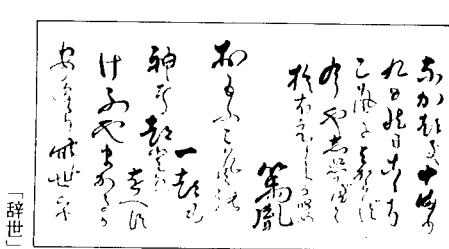
天保六年六十歳以降は再受難期であつた。『皇國度制考』『天朝無窮曆』について司天台からの究問があるなど、次第に幕府は篤胤を忌避しはじめていた。然し一方では天保十一年に白川家から神祇道學頭職を委嘱されるなど名声に衰はなかつたが、晩年に近かつた。天保十二年（一八四一）六十六歳正月一日に突如として著述差止め、国元へ帰還せよとの幕命が達せられる。時流を超えた学問と道において当時の幕府の根底をゆるがすと考へられた結果であろう。止むなく帰藩し再び秋田の地を踏んだ篤胤は、しばらくの間大和田生家の一室に寓居した。次年にはようやく藩よりの中亀ノ丁に居宅をうけ、ここで天保十四年閏九月十一日に没したのである。「おもふことの一つも神につとめおへすけふやまかかるかあたらこの世を」と数日前に記したものが辞世となり、まさに絶筆となつた。

篤胤は生前に墓地として手形山広沢山を定めていた。それにより、眺望のよき広沢山に、

後期 受難再遇

挽期

郷里秋田帰還



* なきがらは何処のもとにはて
むとも靈は翁のもとにゆかな
む

神とも仰ぎ尊び親しんだ宣長の奥墓のある伊勢の国に向け^{*}、正装正座にて葬られている。

2. 学問と思想

著述之書、凡百余部、卷
數千卷ニ近カルベシ、但シ
此ハ究メテハ言ヒガタク、
只大凡ヲ云ルナリ

一身を学と道に捧げ、生涯に著述百部千余巻といわれ*、その内容は古史、古道、易学、曆学、仏学、道学、儒学、文学、語学、尺度量法、諸宗門など和漢洋学に亘って考究した。この中で『靈能真柱』『古史伝』『古道大意』は神道史上における重要な著書であり、学問思想上でも中心的存在である。

国学の萌芽は元禄の頃に見られる。その濫觴を契沖の文獻学的基礎つけの努力の功績において、中世における仏教、陰陽道との癒着、歌学や儒学における秘伝、奥義に対する反撥から、客観的、実証的精神を我国の古代に求めていった点におく。従って契沖、春満真淵、宣長と次第に国学論が展開されてきた中に、篤胤に到り、国学は更に実践的な面でも古道を求めてきたところに発展性を認めるものである。篤胤は単に古典の実証的な研究に止まらず、一般的の学問研究上的方法論としても価値ある方法を明確にし、この方法論に即して、古典の究明に帰納を試み、「道」というものをものした点に独創性がある。古道とは即ち神道であるが、篤胤は「謂ユル天下ノ大道デ則人ノ道デアル」と述べ、眞実の神道とは神國の神國たる國体を知り、神の成し賜えるものであり、これに習い学びて、正しき道を行なうことが誠の道であるといつている。

儒教に対する批判は、宣長の方向をひきつぎ、儒者は國体や臣道の本義をもたないと非難し、特に仏教に対する対抗では、國風の自然にふさわぬ教法であり、教説においては、釈迦滅後のものを論証しているが故に、後人の所産による虚偽虚妄なものであると力説している。篤胤の國学は人間本性に即した道学の確立であり、それは敬神崇祖の生活に実践規範を提示することの必要性を認めている。即ち惟神は自然と合致して、自然とは神習うことであるといふのである。

古史に対する研究方法は、一義的な記紀の勝劣真偽の決定を避け、撰録の由縁が異なるものと理解し、記は裏、紀は表と解している。^{*}新撰姓氏録、六国史、風土記、律令格式、古語拾遺を重んじ、延喜式祝詞にあつては最上であり、皇國の言靈の正音にのり、大御口^{*}づから伝えたものとして、至上の一つとしている。また古史には異説があることから、これを正しく撰び採つて一貫した古史を試みたのが古史成文であり、宣長の古事記伝に倣いこれに解釈をしたのが古史伝である。古史伝は篤胤が生前にも、また歿後にそれを引き継いだ矢野玄道にも遂に完成を見ることはなかつた。

篤胤の幽冥觀は神道にとって重大な示唆をもつてゐる。宣長が「安心無きが安心に御坐

*「人間の精神を堅固にするためにはこの死後靈魂の行方を明らかにすることが根本である」と「靈能真柱」にいう

*「本教外編」
*「新鬼神論」

「候」といっているのに対し、死後の魂の行方を明らかにしている。即ち、人は死して魂は神であつて幽靈、冥魂などといわれて幽冥に帰するもので、この冥府を掌治する神が大国主神であるというものである。靈魂は永久に滅することはなく、靈界は現世から見ることは出来ないが、幽界からは現世の様は明らかに看取り得るという。また、再生論もこれには篤胤の独創的なもの一つで、『靈能真柱』の結論的存在でもある。ここでは冥域の信仰と再生を強調するものである。

篤胤の研究方法はあらゆるものを駆使して普遍原理を立て、在るべき姿の道理を突き進んで明らかならしめねば措かなかつたといえる。その上に立つて信仰を持ち、実践的な国学を位置づけたのである。この学問と思想は地方神官、武士、郷士、商人、農民などにいたるまで門人五五三人、没後の門人一三三〇人余りという驚異的なまでに全国に受け入れられている。

3. 篤胤と秋田

*荷田春満「創倭学校啓」以来
国学校の設立は国学者の懇情
するところであった。秋田の
和学方は全国でも最も早い時
期に創立された

*新野直吉博士稿「神道学」(一
八八号)所収「秋田における平
田篤胤」

藩末の文久二年、没後廿一年目にようやく国学塾ともいえる雷風義塾の設立により、平

田古道学が再講されたのである。この後の趨勢は戊辰の役と明治維新により昂まり、没後入門者数もこの時期が最も多い。この中で勤王派の指導的人々は、はつきり門人とは見られないが、平田学を奉じていたことは間違ないと思われる。それは、「本居大人の教へを奉じ」た惟新館設立者吉川忠行の子忠安が雷風義塾設立に協力し講師となり、「醜の篤胤」とまで評し嫌った本居門の高階貞房の子、大山重華も、篤胤を祀る神社の祀官となるなど、平田国学が維神の根本思想として、その中心的役割を担うという当時の状勢を無視出来ない程、没後に再び平田国学が開化したことにある。維新後、神祇官の主要構成員となつた者は平田派門人であったことでも理解できよう。

秋田で正しく平田学を継承した者は小野崎通亮と考えられる。

やがて、明治十四年に到り明治天皇奥羽御巡幸の際、祭粢料が下賜され、八橋日吉八幡神社境内に平田神社が創建された。明治四十二年には秋田県教育会が崇敬母体となり、信



三、佐藤信淵の学問と事蹟

1. 生涯と事蹟

*『和漢年契』の手書に基く

信淵は明和六年（一七六九）六月十五日*雄勝郡に生まれる。元海、椿園、融齋、桜庵の号があり、通称百祐という。



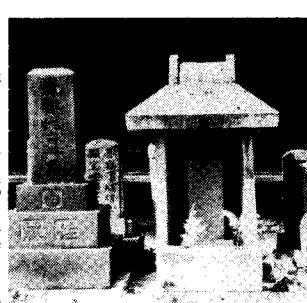
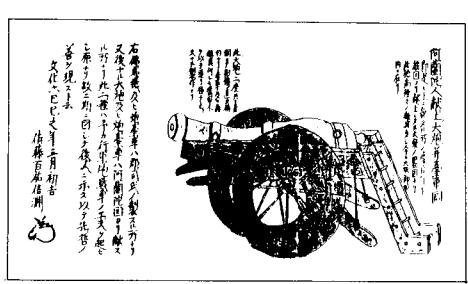
父祖四世はみな学問を好み、五代に亘って家学を人成したといわれてきた。高祖歎庵信利は医を本業として諸国をも廻り、地質学を究めて『國土経緯記』を著したという。これが佐藤家家学の根本とされてもきた。曾祖父元庵式行（のぶゆき）はこの志を嗣ぎ、経済学を研考し『氣候密驗錄』をものし、これが一書は家学の眼目とせられている。祖父の不昧軒信景は農政、山相、開物の学を修め『土性辨』等を著わし、その三男が父玄明窓信季である。信季は専ら家学を成し、『提防溝血志』『培養秘錄』等を著わしたと伝えられている。著述中には名称より伝わらないものもあり、本人の著作か疑う説や信淵自身が手を加えたものであるなどの説がいわれている。然し転写による誤りや記憶違いもあつたろうし、広く産業学全般に及んでいることもこれから見ても解り、その意味では、家系においても相当の学問的素養があつたと考えざる得ない。

信淵は、天明四年（一七八四）十六歳の時、父の客死後遺訓に従い江戸に赴き、宇田川槐園の門に入り蘭学を修めた。これ以前、僅か十三歳にして父に引き連れられ蝦夷地に渡り、帰途は東北各地をめぐり気候や物産を調べたといわれる。学問的素質は血統に由来する天性であったろう。彼の経済学は井上潛に学び、木村泰藏及び山村昌水に天文、地理、動植物の学の他、曆算測量等も学んだという。

寛政七年（一七九七）廿七歳江戸京橋に医業を営む。寛政九年（一七九九）廿九歳の時に母を失い、文化四年（一八〇七）三十九歳の時徳島藩に招聘せられて兵学講師となる。この時に『鉄砲窮理論』を著わし、自走火船を考案する。これらにより一気に名声が上り、その門に集まる者が次第に多くなった。その後、西洋の兵学、砲術、航海、通商を説くにあたり、時の嫌疑に触れる恐れがあり、上総国大豆谷に退居し、家学大成に志を立て専ら著述に従事して晴耕雨読の生活を続ける。

天明三年十五歳の時に父の信季が産業などについて藩の政策を批判するところを当局の

淵を合祀して彌高神社と改称された。大正八年には県社に列格。昭和十八年に從三位の追贈を受けている。



*『佐藤信淵家学大要』に全文所収。『本藩の国勢を殷盛に御取建被成候はば小生に勝るや遠し』と『死とひきかえに進言』している。

忌諱をうけて役人に追われて郷里を脱出したのに従つていったこともあり、佐藤家は代々藩の施策に對して批判的なことが多くあつたらしく、信淵は開国論者でもあつたことなどからか、數度の江戸追放を受けている。これらも眞義を求める学究者の家系のなすところであつた。

文化九年（一八一二）には妻いせが病歿する。この数日後の十二月廿八日には久保藩家老匹田松塘に出した。藩内で墮胎や間引を招く政治に對して激しい忿怒を表した「奉呈松塘匹田君封事」は有名である。

文化十二年（一八一五）四十七歳に平田篤胤の門人となり、また幕府神道方吉川源十郎門に吉川神道を学び、家学根本の哲理の樹立を得た。『天柱記』『天地鎧造化育論』『宇内混同秘策』などは国学的神道哲理が基本となつてゐるといつてよい。文化十三年（一八一六）には吉川家神道講談所建設一件につき町奉行の誤解を蒙り、江戸払を命ぜられ諸国を遊歴する。文政十一年（一八一九）五十一歳に三度の大豆谷に僑居し父祖伝來の宿志達成に精魂をかたむけていた。文政十二年（一八一九）六十二歳には『農政本論』『草木六部耕種法』の著述を完成するに至り、天保三年（一八三二）六十四歳武州鹿手袋に居寓し『土性辨』を訂し、一村を富ましたのであつた。弘化三年（一八四六）七十八歳には前將軍文恭院家斉の三回忌により江戸払いを赦免されている。

嘉永二年（一八四九）八十一歳六月より宿疾漸く追り平臥するが、なお筆を擱かず『陸戦法秘訣』『水戦法秘訣』など著書五巻を脱稿し、翌嘉永三年（一八五〇）一月六日八十二歳で歿するまでの間、約百日は酒だけで生命を保つたといわれる。同月二十二日松應寺に葬むられる。明治十五年六月三日に正五位を贈せられた。

諸国遊歴にあつて氣候、天産、風俗、人情を観察するとともにこの間に考究せる学問は多岐に亘り、著述一百五十部七五八巻といわれる中、信淵著作は二百五部五六五巻であるといふ。辛苦窮乏の間にも意益は旺んで、その氣概は常ならず、経國の家学の一大組織を完成した。これをして経世済民の為、農政学を講じて物質的文化の促進をはかり、国民として精神上の発展をなさしめようと畢生をつくしたのである。

2. 学問と思想

信淵の豊富な学識と厖大な著作は現在においても驚嘆せざる得ない。「幕末日本の偉人」

「徳川時代経済学界ノ最後ニ輝ケル學界ノ巨星」とまで称された信淵の思想は、その最大の特徴を、理論的に体系化された学問の構築にあつた。その学問の全貌は時代を変革しよ



*『佐藤信淵』古志太郎著
*『佐藤信淵ノ農政学説』中田公直著

ここに龐大な著作の中から農学におけるものを拾い上げて学問大系を見てみたいと思う。

信淵は『復古法問答書』中ににおいて農政七部書なるものを上げている。『國土經緯論』『氣候審驗錄』『土性辯』『提防溝洫志』『培養秘錄』『種樹秘要』『草木六部耕種法』であり、作物とその栽培、土壤、肥料、気候、農政、農事改良といった内容で、極めて論理的で現代にも基本的な考え方としては通するものがある。

この体系化されたものには高い評価がされている。栽培の究極目標は生長の原理の認識であるときえいっている。六部耕種法には、先ず『鎔造化育論』で万物の化育神理、生長の原理を知り、『土性辯』において四十八等の土質を見、『氣候審驗錄』において二十四番の気候に適合するものをあてて、さらに三十六種の肥養は『培養秘錄』から得ることにより成し得るとするのである。ここにおける哲学的構想はその壮大さにおいては現在までも、これを凌駕するだけの書物はないという評価がある。

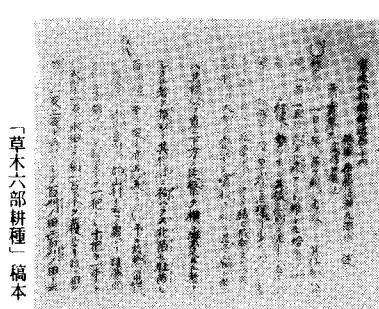
ただ批判的には、理論がすこぶる先行しているため実践的な面では農学に關することでは不足ともいわれている。然しこの批判以上に全般の理論の精緻さ、理論大系にあつては学問の方法論とともに学ぶべきものが大であろう。

3. 信淵と秋田

『奉呈松塘匹田君封事』は郷里秋田の藩政について厳しい批判をしていることは述べたが、その内容文言を読みれば、情勢と愛郷心が込められていることを読みとることが出来ようか。自分の死と引き替えに論破しているところからも窮える。これと同様に先の『草木六部耕種法』においては、卷十四「需実第三篇・家伝植法」において、稻刈り後に一把づつ杪を左右に分けて田の畔に並べて立てる、島立しまだてという乾燥法をとっているが、これは田の水に浸すことになり、翌年の夏には皆腐敗粉砕するので、弁明をしたれども、民の頑なることにより改めることがない。といつてはいる。これによる信淵の感慨は、「出羽の國の秋田領の愚昧なる」とか「秋田米は日本第一の下品なり」というのである*。信淵の秋田を名差しで述べる、然も著作の上で理論実証例としてあげるところには、やはり、秋田を悪くいうことで、かえって秋田を良くせんがための逆説的な愛情とうけとれまいか。あるといつてはいる。信淵の先見の眼はするどいものが、あつたか知れよう。容貌が「魁岸」で、志氣は「個價」であったという。この強さが反面、秋田の故郷の人々や藩にとつても受け入れられなかつたものといえよう。

4. 篤胤と信淵に共通するもの

* 後に斎藤宇一郎も乾田馬耕れ米と農名高いのはこれら束立て乾燥法にも一因があるといつてはいる。信淵の先見の眼はするどいものが、あつた。



「草木六部耕種」稿本



郡山信淵文庫と生誕碑（羽後町）

雲を伏す月は雨とお降りて
神さの道、身を蓋す年
産靈神教、明シテ以テ
世界萬國ノ蒼生ヲ
安ん最初ノ皇國ノ
帝タルノ知ル
文政六年四月十日
松井在義信撰

手寫

生没年も大体において同時代といえるこの二者は、その生涯においても秋田で名を上げたる訳でない。当時他の学者同様に中央において大成したという点と、氣概のある学問思想への執着は可成似ていると思える。方法論や学問的内容においては異なるが、その底辺にすえた思想と農民や庶民に浸透した点におけることは、国内情勢の不安定という時代も考慮せねばなるまいが、経済上、政治上の変革の時勢に接して、深く熟慮したといえまいか。望郷をおし去りがたかったと思える篤胤も信淵も「我国は万國の祖国」と考るところは、ある意味で国学上の思想よりも同郷という基盤に思えてならない。

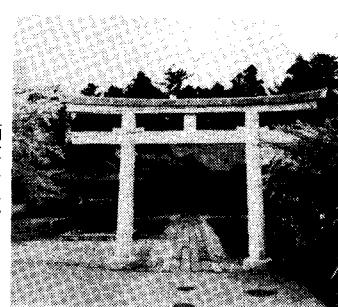
四、国学の現代的意義の私見

国学をするは古道というものを闡明にする古学を放究していくことによる。その中で篤胤は特に古学によって上代の道は「惟神之道」に「神習う」ことを究めたのである。国学が現代において如何なる意義をもつかといえば、篤胤がとった道を歩むことが一番早い。私見を述べれば古学を学ぶこと自体が現代に活される遠いようで近い道である。即ち、上代がいかに高度文明をもつていたかを見極め、且つそこに人間社会の模範的生活観があつたかを知ることにより、それにより近づけようとする嘗みは、現代に国学をする意義にはかならないと考えるのである。

つまり、原初に立ち還えり、根本たる原理を究め、その原理たるものに照らし、生かしていくことである。具体的には、日本人本来のもつ豊かな感性に学び、それを磨いて眞実の道を歩むということもある。即ち、篤胤の古道から照らせば、敬神崇祖の生活を実践規範的に歩むことである。日本文化の根源は神道にあるという訳である。

文化は個々人の主体的な営みの中から生まれてくるであろうことは、近世国学の発生に照しても基本的に同じ働きがあつたことが解る。日本人が日本文化の保持者として如何に生きるかを問う時、日本人として自らのアイデンティティを持つことに必須なもの一つとして国学の伝統がある。国学者の理想が古代に求められる基本的原理を民族の共通的思惟様式に高めようとした流れの中に「現在」もあると考るからである。畢竟日本人の日本文化の保持理論として国学は生きるといえよう。その上で文化や伝統に一つの立場をもつことにおいて、現代に、より積極的な国学をする意義があろう。

註 本稿は秋田県生涯教育テレビ講座における製作番組原稿として作成したものに加筆
訂正をしたものであることをおことわりしたい。



彌高神社外伝

渋谷 鐵五郎

彌高の神殿

神靈の鎮まりたもう彌高のやしろにぬかすこと私は、神殿にまつわる遙か悠遠なる昔日の息吹きに想いをかられるのである。

そもそも彌高の神殿は旧秋田（久保田）藩主佐竹家の主護神（氏神）であり佐竹一族はもとより、藩士に深く尊崇された武人の神「正八幡宮」の神殿であった。

八幡の神は、古来このかた弓矢の神として武人に尊信されたことはいうまでもなく、また佐竹家においてもその例外でない。

正八幡宮常陸に勧請

清和源氏の子孫佐竹家においては常陸時代に、第一の守護神として再度にわたり八幡の神を勧請した。その第一は初めて佐竹の苗字を称号とした新羅三郎義光の孫昌

義（①常陸太田では佐竹氏初代、②秋田では佐竹氏三代）が京都の石清水八幡宮から勧請したという

大八幡宮。その二是佐竹義人（佐竹昌義の子孫①では十三代、②では十四代）が鎌倉の鶴岡八幡宮から勧請した小八幡宮（後に小を正に改めた）である。

この正八幡宮の勧請にあたって

義人は、鎌倉鶴岡八幡宮の神女鶴（つる）を介して八幡宮の御神体なる絵像を写しとり、模写の像を八幡宮に收め貞像を領国常陸に勧請したという。

神女鶴は義人の内意のもと勧請の御神体なる御絵像を守護し、義人に従つて常陸の太田に移つた。かくして太田城内に正八幡宮が鎮座し、鶴は御神式御祭事等の神事を悉皆主宰し佐竹神人の座上を仰せつけられたという。

また鶴は義人の内意について「御密々に御深慮の次第を仰せ含められ」その内容は「口傳をもつて一家相傳、御神秘第一の儀に候て白地（あからさま）に御書き顕（あらわ）し難い」と記し、その

でいる。

正八幡宮の勧請された年月は①応永二十三年（一四一六）とか、②永享三年（一四三一）という。

①の場合は佐竹義人十七才、②の場合は三十二才である。何れの年月か、定かでない。義人は応永七年（一四〇〇）生れで、上杉家から賛嗣に入つた人で応仁元年（一四六七）十二月二十四日、六十八才で没した。

鶴は「義仁、寿、被成候間、鶴御前に立、拝申也、依之御当國の神職之上に被成候者也」と、文明九年（一四七七）十二月十三日の「鶴子文書」に記録してある。この場合の「寿」は「ことぶき」寿賀、すなわち長生きの祝賀と解される。義人は六十八才で没した

から、寿賀の祝賀は還暦の六十才、すなわち寛政元年（一四六〇）の年にある。

鶴は女系をもつて、代々正八幡宮の神事を継承した。

正八幡宮の秋田遷宮

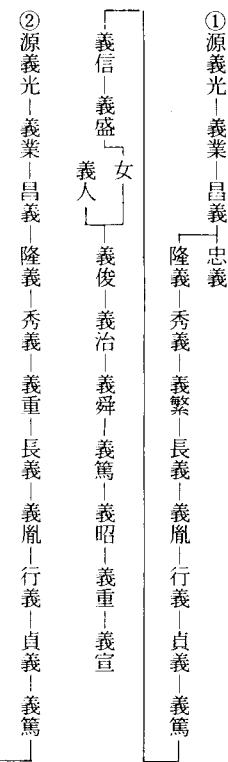
長七年（一六〇二）、関ヶ原の駆け引きが災いして佐竹義宣は秋田に国替えとなつた。この年の九月義宣は、土崎の湊城に入つた。しかし安東（秋田）氏の湊城は狭隘なので久保田の地に新城の工を起しに移つた。これが佐竹藩一七〇年の治所久保田（秋田）城となるのである。

佐竹家の転封に従い、その氏神なる大・正八幡の両神靈は、佐竹家の移転した翌年の慶長八年（一六〇三）正月廿四日、水戸より陸路越後に至り、舟にて土崎湊へ四月五日夜着船し、土崎神父（日吉神社の神主）方へ宿り、同宅御納戸に神靈を仮の安置をし、後に御城裏（土崎湊城）に仮の御神殿を造営し滞りなく長途の遷宮を終えた。

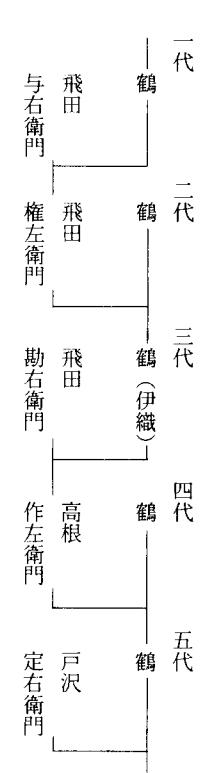
慶長九年八月末、佐竹義宣の久保田移城により正八幡の神靈は、新城内に仮の御堂をつくり移つた。さらに十二月晦日中城へ遷宮し、ここにとどまること三年、慶長十二年（一六〇七）二月、三の丸山の手の別郭に明治の初めまで鎮座した。

山の手の別郭は、佐竹の一族にして重臣である石塚大膳の屋敷であった。この石塚大膳を城下東根

佐竹氏略系



は、次のように続いた



〔義宣—義盛—義人—義俊—義俊—義治—義舜—義篤—義昭—義重—義宣〕
〔②源義光—義業—昌義—隆義—秀義—義重—長義—義胤—行義—貞義—義篤〕

小屋町に移し、その跡地に正八幡宮と、これも常陸から遷ってきた稲荷社が遷つたのである。八幡宮が鎮座したので、この地は八幡山の別郭とも呼ばれた。正八幡宮は、神女鶴と神主近谷小太夫によつて神事が奉斎された。

神女鶴と神主小太夫

これまで正八幡宮の神事を掌る神女鶴と、神主小太夫について断続的に描出しあが、その大要について述べておこう。現在掌中にある資料を駆使しての記述には、少からずの紙数を要するので簡略に誌そう。

さて右の神女と神主両者の上祖は、ともに鶴岡八幡宮の社家であつたという。神女鶴については、既述の如く鶴岡八幡宮の神女であ

り、また社家の女ともいう。また

源頼朝以来の女系神女ともい、数々の説話がある。しかも常陸に

あつても、秋田においても鶴とい

う家の女系をもつて神に仕えた。

神女鶴家の女系とは代々出生の女子をもつて家系の継承者とする

が、智とりをしての家系でなく鶴

自身、土分の家に嫁となり武家の

奥方という身であった。したがつて身はひとつだが①は鶴家の当主

で正八幡宮の神女、②は武家の妻女。つまり①は八幡の神事のみを掌る家、②は嫁家の人、つまり主婦。要するに重複した境涯にあつた。鶴家の苗字は鎌倉にあつた。鶴家の苗字は鎌倉にあつた。

さて右の神女と神主両者の上祖は、ともに鶴岡八幡宮の社家であつた。鶴岡八幡宮の社家である根氏、常陸に移つて飛田氏、秋田に転じても飛田を続け、明治に至つた。

秋田に移つてからの鶴家の代々

女系といつても、それは立前で必ずしも女子が生れるとは限らない。そのときは、出生の男子に娶つた嫁をもつて後継者にした。一

代目鶴は、女子なく息子の嫁を継承者とした。二代目鶴は女子二人より子がなく、長女を三代目とした。勘右衛門を聟にとり武家の飛田家を継承したが、男児生れて間もなく勘右衛門は逐電してしまった。

字を遠祖の高根を用いた。その嫁が、四代目鶴を継承。以下は代々

美子（女子）をもつて、明治へと続いた。

神主小太夫（近谷）家の祖先も

鶴岡八幡宮の社家に生れ、佐竹義人八幡勤請に社家として常陸に赴き、次いで秋田に移つた。した

がつて小太夫は、鶴と表裏一体となつて八幡の神事に勤めた間柄である。

正八幡宮の神靈と神殿の変遷

家庭は夫の失踪により断絶となり、一子作左衛門は浪人となる運命にあつたが、母親（三代目鶴）の力によつて三人扶持で藩に仕え、苗

佐竹義宣の国替によつて正八幡宮は、久保田城三の丸別廓に鎮座したことは前述した。先輩格の大

八幡宮は久保田城下外町の四十間堀町に移ったが、元禄五年（一六九二）三月二十八日、寺町の一乗院境内に移転した。ところが七年後（一七〇〇）六月四日の外町大火に一乗院ともども類焼し、ともに城内の正八幡宮境内の空地に移り、やがてそこにそれぞの社殿、寺院を建立し定着する。大八幡の社殿は安永四年（一七七五）六月十七日に竣工し、遷宮した。正八幡、大八幡の両宮は、以降しばしばの修復、普請を重ね、現在の建物は次の年代の普請という。

大八幡宮、文政初期（一八一八）

（一八二〇）
正八幡宮、文政二年（一八一九）

四月朔日

（秋藩紀年・鶴家文書）。

時勢は大きく進み慶応三年（一八六七）十月十五日、將軍徳川慶喜は大政を奉還し、次いで十二月九日將軍を辞し徳川幕府は終末を告げた。

しかるに翌四年正月三日鳥羽・伏見（京都府）に戊辰の役が勃発。徳川軍は敗れ、徳川慶喜は江戸城を明け渡し蟄居諱慎。旧幕府の徳川家は潰え去ったから戦いは終つ

た。八幡宮は久保田城下外町の四十間堀町に移ったが、元禄五年（一六九二）三月二十八日、寺町の一乗院境内に移転した。ところが七年後（一七〇〇）六月四日の外町大火に一乗院ともども類焼し、ともに城内の正八幡宮境内の空地に移り、やがてそこにそれぞの社殿、寺院を建立し定着する。大八幡の社殿は安永四年（一七七五）六月十七日に竣工し、遷宮した。正八幡、大八幡の両宮は、以降しばしばの修復、普請を重ね、現在の建物は次の年代の普請という。

大八幡宮、文政初期（一八一八）

（一八二〇）
正八幡宮、文政二年（一八一九）

四月朔日

（秋藩紀年・鶴家文書）。

時勢は大きく進み慶応三年（一八六七）十月十五日、將軍徳川慶喜は大政を奉還し、次いで十二月九日將軍を辞し徳川幕府は終末を告げた。

しかるに翌四年正月三日鳥羽・伏見（京都府）に戊辰の役が勃発。徳川軍は敗れ、徳川慶喜は江戸城を明け渡し蟄居諱慎。旧幕府の徳川家は潰え去ったから戦いは終つ

た。八幡宮は久保田城内に帰陣した。鶴、近谷はこれに従つた。明治四年（一八七一）一月十三日、藩名久保田は秋田に改められ、秋田藩は秋田に飛火し秋田戊辰戦の戦火は秋田に飛火し秋田戊辰戦の開戦となる。戦闘は、①東軍と②西軍をもつて戦つた。

①の東軍とは薩長の強行する会津・庄内討伐に反対する奥羽

越の各藩によって結成した攻

守同盟軍（同盟軍）。

②の西軍とは薩長兵を主力とす

る連合軍（連合軍）。

秋田（当時は久保田）藩は紆余曲折を経て西軍に連合した結果、同盟軍（仙台・庄内兵主力）の大

挙する進撃を受け藩内の三分の二

が戦場と化し、河辺郡まで敵は進

攻し久保田城を落城の危機にさらさ

れるに至つた。よつて藩主佐竹義

堯の出陣となり、これに続き九月

六日正八幡の神靈は河辺郡戸島村

に出陣した。九月八日、明治と改

元。九月十日、椿台の大会戦。こ

のとき平尾鳥村山嶽に白旗數十流

あらわれ、敵軍は大いに恐れ敗走

したという。彼我ともに正八幡の

神威におそれをなしたと、語り伝

えられている。九月二十七日庄内

藩の降伏をもつて終戦。十月九日、

正八幡は久保田城内に帰陣した。鶴、近谷はこれに従つた。明治四年（一八七一）一月十三日、藩名久保田は秋田に改められ、秋田藩は秋田に飛火し秋田戊辰戦の開戦となる。戦闘は、①東軍と②西軍をもつて戦つた。

同三十二年五月秋田神社は、千

にあった社寺は、庇護者なる藩を

失い縮小廃止となる。藩主佐竹家

の篤い信仰のもとにあった御城内

三社（正・大兩八幡宮、稻荷社）

は、同五年四月十三日正八幡宮内

に合併祀され、八幡神社となり大

八幡宮と稻荷社の社殿は空殿とな

った。六月二十九日秋田城地は陸

軍省の管轄となり、藩制時の建造

物は追々城地外へ撤去することに

なる。翌六年十月三日、八幡神社

は県社に指定された。

同十二年十一月、かねての予定

により秋田城地に建つ神社（八幡

神社と空殿となっていた旧大八幡

宮の社殿）は東根小屋町に買収し

同時に佐藤信淵を合祀し彌高神社

と社名を改めたことは人の知るところである。その経緯については、

本「研究所報第一号」に詳しい。

大正五年四月、彌高神社は千秋

公園（二の丸）に奉遷され、同八

年二月県社に列した。昭和二十八

年十月五日神社の本殿、拝殿は秋

田県重要文化財に指定された。な

た。同十三年七月十九日、秋田（久保田）城全焼。同二十二年四月一日、秋田市発足。翌年六月秋田城地は国から旧藩主佐竹氏に縁故払下げとなり、同二十八年千秋公園に生れかわった。

同三十二年五月秋田神社は、千秋公園（本丸地）に移転。同四十年十二月二十四日八幡神社と秋田神社は合祀となり、八幡神社の神靈は秋田神社に遷り八幡秋田神社と改称した。これにより八幡神社の社殿（旧正八幡宮の神殿）は、同四十二年十月、東根小屋町に彌高神社が創始され空殿となつていた秋田神社の社殿をもつて、その神殿とした。彌高神社の源は、明治十四年秋田郊外八橋に創建した平田神社（祭神平田篤胤）を、同四十三年十月東根小屋町に遷し、同時に佐藤信淵を合祀し彌高神社と社名を改めたことは人の知るところである。その経緯については、本「研究所報第一号」に詳しい。

この月に東根小屋町に秋田神社が創建され、空殿の旧大八幡宮の荷社は郡部へ売却した。

この月に東根小屋町に秋田神社が創建され、空殿の旧大八幡宮の荷社は郡部へ売却した。

お神殿は移築の際、柱に腐蝕があり約四寸切りつめたという。真に惜しいきわみである。

城内にあった両八幡宮は、時の流れにより城地を去つたが、ふたたびかくして故山にかえった。やはり、ふるさとの地は神域の地であつたのである。

神女鶴家と神主近谷家の行方

明治維新の奔流によって代々正八幡宮の神に仕えた神女飛田鶴と神主近谷益麿は神職を離れ、明治の浮き世を渡る仕儀とあいなった。

明治元年十一月十日、近谷家上

一代益麿は寺内に建造中の招魂社の神主に任命されたが、翌二年六月招魂社の神主は藩主ということ

で、同社の守護となつた。同八月招魂社竣工。翌九月、招魂社境内に新築した藩舎に近谷益麿は岩城村（秋田市）より転居した。ところが明治五年八月、神官世襲の禁止により益麿は招魂社の守護を解かれ、岩城村の自宅に余儀なき自適する次第となつた。ときに益麿六十九才。

明治五年二月一日戸籍法（壬申戸籍）の施行により九代目飛田鶴は夫である蛭田滝多家の戸籍に編

入となり、神事の家としての飛田

鶴家は戸籍上存在しなくなつた。

同四月十三日御城内三社の合祀により神事は神官一人だけとなり、歴史ある鶴家の御宮守は廃止となつた。こうして鶴は蛭田家の主婦となつたが、数百年におよぶ鶴家の誇りある家歴を惜しんだ。

鎌倉以来連綿、鶴の名をもつて誇り高き神女の地位にあり、常陸においては神人の座上に位置したという——こうしたこと念頭に秋田における三代目鶴は次のように書きのこしている。

御神事の節　社参仕候には

先年は乗物にて打物までも為

指候よしに候へ共　近年は相

省き歩行にて社参仕候

曾て巫女等の類には無御座候

単なる神樂や祈禱巫女ではないと、鶴は格式の高さを誇示している。この三代目鶴は、鶴姫様御名に相障るということで「伊織」という名に改めたが、享保三年（一七一八）九月十六日、藩の寺社奉行から「差し障りが解けたから昔の名、鶴に改めてよい」との通知を受けている。差し降りのあつたという鶴姫とは、おそらく佐竹家

の姫君であろう。

元文三年（一七三八）二月二十

七日、六代目鶴の頃、藩の寺社方から「鶴の肩書を八幡巫女と改め、縁組等は諸士と勝手に致してもよい」との仰せ渡しを受けた。家格の高かつた証左の一端を物語つてゐるようである。

鶴の御宮守解任となつた翌日、その長男蛭田武治は、八幡神社の祠掌に採用された。武治は慶応四年（九月八日明治と改元）四月二十六日、二十才で妻を娶つた。妻は佐竹藩の重臣渡江内膳の四女ミツ（十八才）である。

明治十二年五月二十六日、鶴の夫蛭田滝多が没した。この三年後の十五年三月、鶴は歴史ある飛田鶴家を城地北の丸新町に再興した。ときには鶴、五十六才。

鶴（戸籍名はツル）は市井の人となつても「口傳をもつてする一家相傳の神事」を黙して語ることなく、十二年後の明治二十七年九月三日、六十八才をもつて死去し

てしまつた。同三十三年六月二十

月一日、四十九才で没。その長男新助は陸軍に志願し、陸軍歩兵曹長に進んだ。日露戦争に出征し、明治三十八年三月七日奉天に戦死した。二十九才。新助の妻タカは、井出三郎の女。タカの兄大象は東海林家の養子となり、その長男が太郎。流行歌手の巨星として一世を風靡した、あの東海林太郎である。新助の後嗣信貞はアンゴラ兎の採毛加工に従事していたが、昭和十九年八月二十七日、ブーゲンビル島に戦死した。三十六才。その長男千秋氏は、横浜市に居住している。

なお鶴家所伝の古文書（約三六〇件）は同家の絶家後、蛭田家に所蔵されてあつたが、同家の県外転出の際、鶴にゆかりある神職の名、鶴に改めてよい」との通知を受けている。差し降りのあつたという鶴姫とは、おそらく佐竹家に譲り渡した。

岩城村に自適の近谷益麿は性不

と号した。その教を受くるもの近在近郷から口に口に多くなり、遂には大久保、一日市、五城目、能代、桧山、男鹿、仙北、院内銀山等にも斯道の点者となり巡遊した。

明治十五年十一月、大曲より土崎に帰り間もなく病氣となり、翌十六年十二月九日、八十才の天寿を全うした。

益磨は仙北郡角館の神明社神官正六位鈴木淡路守重堅の次男とし、享和四年（一八〇四）二月一日文化と改元）一月十日角館に生れ、近谷家に養子となつた人。紀行文作家として不朽の名著を秋田に残した菅江貞澄は、文政十二年（一八一九）七月十九日、この鈴木家に七十六才で没した。ときに益磨は、二十六才であった。

貞澄は文化八年（一八一）六月四日、近谷家八代上総正宗光が名刀を所持すると聞き、岩城村に宗光を訪ねてゐる。その刀は近谷家が常陸にあるときからの家宝で、名匠の誉れ高い刀工が出雲大神宮（京都府亀岡市）に畢生の会心作を授け賜へと、神助を祈願し身魂を傾けて鍛造した刀で刀工の靈魂が乗り移つてゐると傳えられてゐた。この刀は、明治となつてから

益磨の代に失つたといふ。

益磨の長子祇磨は慶應二年（一

八六六）二月神道裁許（官途）状を取得し官名を上総と称した神職（社掌）であつたが、役場の書記を兼務した。明治三十四年七月二十六日没、七十三才。祇磨の嗣子通磨は教員を職とし、上新城（秋田市）、馬川（五城目）の小学校校長を約二十年にわたつて奉職した。

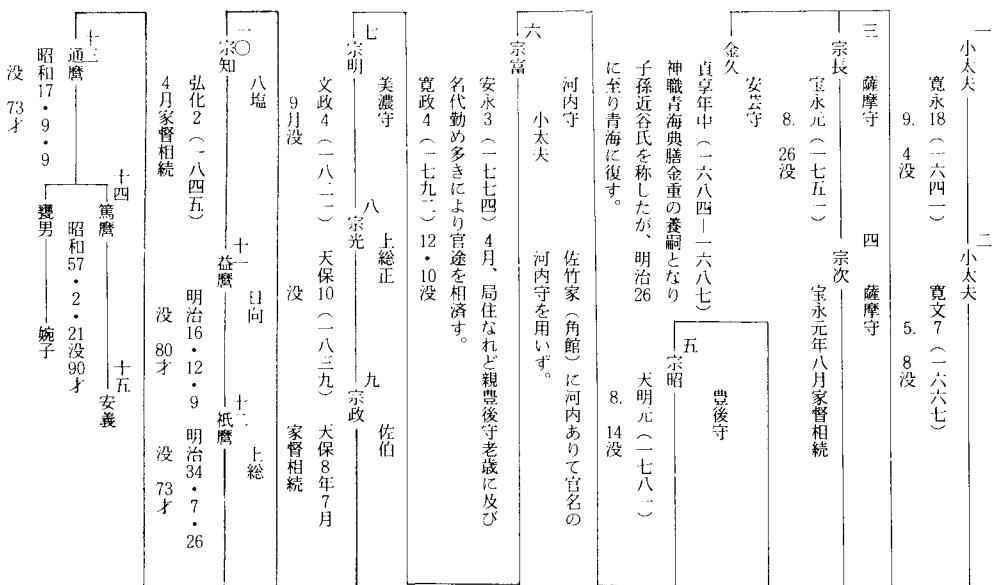
昭和十七年九月九日、七十三才で没した。通磨の長男篤磨は、父と同じ教職員。在職三十五年、この間に南秋田郡内各地の小学校等に奉職し、約二十校の校長を勤めた。

昭和五十七年二月二十一日、九〇才の天寿を全うした。

篤磨の子女は、第一子の長男を筆頭に続けざま五人が天逝した。あまりの不幸続きに恐れをなした篤磨は、ちまたのいわゆる神様（巫女）にこの旨を訴えたところ、次のように神託があつた。

近谷家傳來の名刀を失つたため、その刀の怨靈が子孫に祟りをなしてゐる。すみやかに刀の靈を供養せよ、と。

藤原姓近谷氏略系



近谷家は約一六〇年前の昔から明治二年までの五〇年間にわたり第八代目の上総正宗光、佐伯宗政八塩宗知、日向益麿と連綿し、この彌高の神殿にあって神女鶴と神事に勤仕した。

佐藤信淵大人追贈余談

桐原善雄

て草木も眠る深夜、極秘裏に神鬼を慰靈したという。篤磨の嗣子安義氏は、七番目に生れた一人むすこで秋田市に住んでいる。

近名家の木屋謫居により、神女
鶴子と、近谷は常陸以来からの不
可欠な間柄なるを知り、いきおい
鶴家所傳の鶴文書を耽読する。

郷土の生んだ大偉人、平田篤胤大人・佐藤信淵大人御二柱を祀つてゐる彌高神社は名社として知られている。

内手形山に手形山神社建立を計画し、場所、資金等着々と運動を進めていたのを取りやめ、平田神社に佐藤大人を合祀することに変更し、社号を彌高神社と改めた。社地狭いところより千秋公園の現在の美地に奉遷となる。

所縁つまり彌高神社との「ゆかり」を述べたいがため、思わずえんえんとつたない文をつらねてしまつた。

神社とのゆかりと申しても、決して祭神との縁故ではない。冒頭に述べた如く祭神の鎮座する神殿にまつわる所縁なのである。

近谷家十三代通暉の二男、つまり十四代篤磨の弟甕男（みかお）は池田家の養子となつた。その甕男の二女（嫡子）が、私の妻である。夫婦は一世という。二世といふ絆をもつて私は、近谷家の由緒にひかれ同家の資料をめくつた。

筆の表裏にわたる誇りや苦惱が書き連ねてあるのに驚嘆。百年以上前の古い文面に鶴女の人生がじみいつしか鶴女の直話を聞いているかの錯覚にひたることしばしば。神女鶴と神主近谷の概況を記すに至ったのは、こうした経緯による

御祭神の御事績は数多く、学問は共にすぐれていた。世に医術について余り知られていないが、医術も学問同様すぐれていたと伝えられている。

至ったのは、こうした経緯による、
彌高のやしろを想察し、またそ
の神前に詣でるごと私の脳裏には、
曾ってこの神殿に朝な夕な神に仕

れ、親しく昔日を語るかの情景にひとり、俗事を忘れ安堵の境地に達する。たとえそれが幻覚であろうと私にとっては、何にもまさる得難い極致の一ときなのである。

(本所研究調査員)

福格で、その後市内東根小屋に奉遷。秋田県教育会でも平田大人、佐藤大人御二柱を祀らんとして市

佐藤大人は農政学にとどまらず、経世学兵学と巾広く、時には平田大人門人となり、平田神道を研究、

従つて佐藤大人の著書に平山神道の精神が生かされている。「宇内混同秘策」等はよい例である。

息吹いている。秋田経済法科大学の前身、秋田経済大学では佐藤大輔を建学の精神として、平田大人後学、国学者山田孝謙博士の高弟で御祭神研究家、小島昌雄

士の高弟で御多忙な方々の喜びを思ふ爲め、治氏を教授に招き、信淵研究会を組織し、数々の成果を納め、郷土の発展、文化の向上に寄与していくことは世に知られている。

高梨神社宮司川越重昌氏は教職の傍ら、佐藤大人研究を進め、数多くの力作を有名書店より発行。教

職を退いた今日も研究を続け
講演、著述に忙殺され、特に火薬の
研究に全力投球していると聞く。

いわば佐藤大人研究に半生を捧げての研究したことになる。これは常人のなせる業でなく、只々敬意の目をみはるのみである。このように佐藤学は奥行深く、巾広く、魅力もあって心を引きつけられる。従つて学究者年毎に多くなりつゝあることは如実に物語つている。

追贈上中に至った動機、平田袖
社建立の真相について判らないこ

とが多く、これを解くためには、資料と人物像より術はない。幸い秋田市内追分に羽生氏熟の孫、氏

貞氏が在住している処より御協力を得て、関わりのあると思はれる資料類を探したけれども、発見に至っていない。只資料に近い物、人物像より臚乍ら私しなりに判りつつある。

羽生氏熟は幼にして学問に励み、秋田藩當時、右筆として仕え、維新になるや県書記官に補されて、いよいよ官僚としての人生を歩み始める。又参事官ともなり、時には手帳官として、葉県、埼玉県より請われ、各三年間に出向し、数々の業績をあげている。後に県議会議員や短期間の秋田市長に就任と、巾広い行政官であつた。

秋成社の精神は佐藤大人の農政学、経世学、いわゆる佐藤家学を精神としていたようである。早くより平田大人を崇めると共に佐藤大人を祀り、朝夕祭祀を怠ることなかつたと伝えられている。

羽生氏熟は旧藩時代、石山正だる私熟に通い門人となる。秋田田に於いて勤王、佐幕の両派に分かれて論議を重ねた結果ついに勤王派に属した。師の石山正は佐幕派で側用人であつて、平田大人を信奉したことなく、ついに石山塾を去る。以上の通り

秋成社の結成、私塾を去った事等よりして、佐藤大人、平田大人を崇敬したと思料される。色々と絞つてみると、追贈上申の時期、平田神社建立願上等は御巡幸に的を絞つたと思はれてならない。

明治天皇奥羽御巡幸は三回であります。らせられたが、一回目は明治九年、二回目は明治十四年、三回目は明治三十四年、秋田、山形には明治十四年一回のみに終る。氏熟は宮城御巡幸に随った大久保内務卿と

秋田御巡幸の際特旨を以つて、平田大人奥津城に、東園侍従を遣され、御下賜金賜つてゐる。翌九月十七日八幡神社臨御、羽生氏熟組織結成した秋成社機業場に臨御あらせられた。

り、山形県本吉海村に於いて御沙汰を待てと申し渡されたので、大久保内務卿に隨い各地を視察して

馬	耶ソハカ	一他人ノ愛敬ニハ履物ニ捻ル
文政七軒年十二月	平田篤胤	タルマイタツタボタナシオル
坂倉織部佑殿	マヤ大狗	ニテモ捻ル
天七鬼神之法	数万騎ソワカ	我力愛敬ニハ我分ニ捻ル
	飛鳥印	一人ノ口留ニハ井ノ中へ入ル、
	大狗飛行自在神通	水天咒ヲ唱フヘシ
	ノ指ヲ開キ立	唵ハタヤソハカ
	ソワカ	一人ノ口留ニハ木ノ葉ニ捻リテ
貴キ社ノ神木カ又ハ年経	大海印	走り人ニハ木ノ葉ニ捻リテ
タル蓋木ノ一ヲ切ニ二寸八分	内縛シテ家中	二十一日唱ヘサテ此咒
二不動尊像ヲ手ヅカラ	ニチラス	右咒文毎日千返ツ、
シ其像ニ付ル札ニ日	唵ダイクラダッタオルマヤ	三十六書シテ丸ジテ
ヘ仰願是尊神神力	天狗数万騎ソワカ	持チ敵ヲスリマセント
使開眼成就神通自	如此ク二十一日ノ間修行一日	思コトトキ丸メタル咒ヲ
在ナラシメ給ヘ	トシテ此法ヲ成就スル輩	ヘシ極秘五條天下ヘノ大事
右二十日ノ間木ノ元へ行	ハ天地鬼神ニ方便ヲ得	一立隱
ク宅ニ壇ヲ飾ルカシテ供	テ自由自在ナリ一切ニ用ル	婆羅姿
物ニハ	ノ妙術中ニ天下無双ノ	炎帝
桃木	ハアリ三反	毘沙神
スゲ	サテ桃ノ木以下六色ノ供物	右三返觀念スベシ
栗	ヲ黒焼ニシテ密瓶ニ入	人ノ目ニ戸ヲサシカタシ我
ヒエ	祈願ヲ込メテタクハヘ置キ	身ヲハ隠ス神アリ隠ス
キビ	モカブル也	人アリ三反
黒大豆	マタ敵ニ向テ右ノ文ヲ唱ヘ	ワラニテモ切レニテモ何ニテ
赤小豆ナリ	ト三反唱ヘテ九字ヲ	止ムルトキハ仰願ク
皆粒ヲソロヘテ供スベシ	御アラカニ帰ラセ玉ヘ	七女神威徳ヲ納メテ
香花燈明尤モ備フヘシ	切ルベシ	凡テ諸術ヲ用ヒテ
外縛ニ中立合印ニテ	古天七鬼神法欲心私	ト三反唱ヘテ九字ヲ
天狗自在神通ソハカ	心ノ為ニ行フトキハ神四討	止ムルトキハ仰願ク
愛宕山大権現	立所ニ至ル恐ルベシ	御アラカニ帰ラセ玉ヘ
象頭山大権現	恐ルベシ	切ルベシ
高雄山大権現	右天七鬼神之法常	古天七鬼神法欲心私
富士山大権現	陸房海尊傳之由ニ而	心ノ為ニ行フトキハ神四討
白山大権現	往年森川字内ト申者	立所ニ至ル恐ルベシ
虚空法身不動明王	ヨリ受置ク傳ニ而未タ	恐ルベシ
天狗天狗天狗唵阿日	修シ候儀去御懇願	法修事部類稿
	御傳授申上候事	四卷がある。これ
	一勝負ニハ衣服ニ捻ル	は『菅能屋先生著述書目』に、
	食スコトシ	密法修事部類
	ニテカクナリサテ	十卷
九字文十反		此書は、真言祕密の諸儀軌を
		普く見て、部類を分ち記せる
		物にて。其は皇朝の神事。及
		び玄家の修事にも。其法の混
		雜せる事ある。其惑ひを開か
		む為に。勞き記されし物なり
		とみえる。十巻を起す予定であつ

たと思えるが、現在残されている。

のは真言系密宗の經文儀軌類から

抄書したもので、考察らしいもの

はあまり加えられていない。これ

も平田思想とどのような関わりが

あるのか。恐らく玄学研究に伴な

う思惟的関連があると予想される

渡部金造著『平田篤胤研究』に依

れば、篤胤は我国の古代には医薬

と加持祈禱を併用したとすること

により、『篤胤は祈禱を行つた』

という。現に篤胤は晩年秋田藩主

の病気にあたり医薬の処方をする

一方、十七日間の祈禱をした事や

度々平田日記に「痔疾ノ咒禁スル

などと禁厭のことが見えている。

茲にとりあげた「神行之大事」

や「大七鬼神之法」はそれらの一

環を示すとみてよい。こうしたも

のは門人や極く特定の人々に所謂

秘伝として伝授されている場合が

多々みられる。例えば嘉永元年

に「平田大学先生口伝」として禁

厭の法を版本で擧ったものを、川

尻總社神主が発行している。同類

の秘伝口伝文書が方々にあると思

われ、その背景や伝書を今一度集

成する必要もあると思う。

これらは要するに玄学研究の線

上からはずれるものではないであ

るうし、真言密教研究が我國古伝、

実践的な神学面を形成する一助と

したと考えられよう。

（齊藤壽胤）

研究所記事

研究活動

*研究発表「白川派神拝式と平田篤胤」

齊藤壽胤 59.03.15 研究調査委員研

究会

*研究講話「平田篤胤佐藤信淵両大人

齊藤壽胤 62.07.10 信淵大人生誕祭